

社会問題研究における ポストモダン派社会構成主義の可能性

福重 清

本稿は、社会問題研究における「社会構成主義(social constructionism)」の新たな展開とその可能性について検討することを目的とする。社会問題の社会構成主義は、当初から様々な批判や論争にさらされてきた。それらの多くは、彼らが関与するその客観性の水準をめぐってなされたものであった。しかし、近年、欧米においてそうした観点とはやや異なった観点から検討が行われるようになり、新たな社会構成主義の可能性が模索されるようになってきた。本稿は、こうした欧米での社会構成主義をめぐる新たな観点からの批判・議論を「ポストモダン派」として紹介・整理し、社会構成主義の社会問題論の新たな可能性について検討を行う。

1. 社会問題の社会構成主義の展開

ブルーマーの提起(Blumer [1971:298-306])に端を発すると言われる社会問題研究における「社会構成主義(social constructionism)」⁽¹⁾は、スペクターとキツセによるマニフェスト的著作『社会問題の構築』(Spector and Kitsuse [1977=1990])の刊行によって、一つの到達点を迎えた。以来、社会構成主義は、この領域での一つのムーブメントとして展開し、多くの優れた経験的研究を生みだしてきたが、一方で、それは常に批判と論争にさらされてきた。

そもそも社会問題研究における社会構成主義アプローチとは、どのような立場なのか。

スペクターとキツセによれば、社会問題の社会構成主義の基本になっているのは、〈逸脱〉や〈問題〉は「客観的」な行為や状態として定義しえないものであり、それらは「それが問題

であると定義する人びとによる活動である」(Spector and Kitsuse [1977=1990:117])という見方である。それは、従来の「成員にとって状態がいかにかに定義されるのかとはまったく無関係に「実際の状態」の決定因を求めようとする客観的アプローチ」⁽²⁾(Spector and Kitsuse [1977=1990:36])に対するアンチテーゼとして提起された。なぜなら、客観(主義)的アプローチは、「社会学者が社会の状態を評価するにあたって用いる価値を暗黙のうちに反映」(Spector and Kitsuse [1977=1990:59])しており、社会問題を「経験的研究がしやすいように明確かつ明白な仕方」(Spector and Kitsuse [1977=1990:61])定義すること、すなわち「客観的」に定義することに失敗しているからである⁽³⁾。

必要なことは、客観的な状態と状態を〈問題〉だとする定義とを明確に区別することである(Spector and Kitsuse [1977=1990:63-113])。「社会問題の社会学は社会のメンバーのパースペクテ

イヴを研究の出発点とし、とりわけ問題を定義するクレーム申し立て活動に主要な研究対象として焦点を絞る」(Spector and Kitsuse [1977=1990:112])が必要だと彼らは主張するのである。

その後、社会問題の社会構成主義は、多くの批判や論争にさらされた。その批判は、おもに研究者の認識論的な立場性に対して向けられた(4)。そうした批判は、客観的状态とその定義との峻別というその方法論に対する批判と、問題状態の認識をめぐる研究者の価値判断の排除というその目的に対する批判とに大別されると思われる。

前者のタイプの批判としては、例えば、問題の定義は、それはそれとして重要であるが、それとともに客観的な問題状態も扱うべきではないか(例えば徳岡 [1997:96-101]など)といったものが挙げられる。また後者のタイプの批判としては、社会構成主義は、問題の社会的構築性を主張し、定義の偶有性(〈問題〉がいかようでもありうること)を主張しつつも、実は「真の」問題状態を暴露する姿勢をとっている(デバンキングである)というものや、逆に当事者の定義は重要だが、究極的には研究者の価値判断がより重要だとするもの(例えば宝月 [1990:305-324]など)が挙げられる(5)。

このような批判の中でも、方法論的にも、その目的という点においても社会構成主義の根幹を問い返すこととなったのが、ウールガーとポーラッチによって提起された「存在論的な概念区分のごまかし(ontological gerrymandering)」に関する批判(Woolgar and Pawluch [1985a:214-227]; 以下、「OG批判」と略す)である。この批判への対応をめぐる社会構成主義は分裂的な状況に陥ることとなった(6)。

このOG批判は、具体的には次のような二つ

の問いから成っている。

- ①客観的状态を参照することなく、〈問題〉の偶有性を論証することは可能か。
- ②もし〈問題〉が偶有的であるならば、それはなぜそうなるのか。

社会問題の社会構成主義は、従来のアプローチにおいて対象を同定する際に暗黙理に反映されてしまう研究者の価値判断を排除し、あくまで社会問題の「客観的」な確定を目指したものであった。そこで彼らは、客観的状态とその定義とを区別し、客観的状态とは関わりなくなされる定義の説明を研究の中心に設定した(7)。それはまた、〈問題〉の定義が偶有的であるということを示す作業でもあった。

だが、OG批判は、そのような偶有性の論証に疑問を付し、研究者の価値判断の排除と〈問題〉の「客観的」な同定の可能性を改めて問い返すものであった。

この批判に対して、ベストラ——いわゆる「コンテキスト派」——は、社会問題に関する研究において、研究者が何らかの客観的現実についての前提を持たずに言明を行うことは不可能だという立場をとる(Best [1993:137-139])。その上で、「コンテキスト派構成主義は、文化と社会構造のコンテキスト内部でのクレーム申し立てを研究する」(Best [1993:139])ことで、偶有的な〈問題〉構築の過程を説明することを目指した。

一方、イバラやキツセなど——いわゆる「厳格派」——は、社会構成主義の研究にとって客観的状态の参照は必須ではないという立場をとる(Ibarra and Kitsuse [1993:28])。彼らは、〈問題〉の構築の偶有性を問題とせず、あくまで自明なものとして存在するクレーム申し立て活動の過

程やそこでの修辞技法の記述に徹することを主張した(Ibarra and Kitsuse [1993:28])⁽⁸⁾。

さて、OG批判に対しては、もう一つ、やや別の角度から回答を試みようとする立場が存在した。この立場は、90年代以降の、より広範な視角から社会構成主義を再考しようという動きへとつながっていったと思われる。この議論の多くは、おもにホルスタインとミラーの編集した『社会構成主義の再考(Reconsidering Social Constructionism)』(Holstein and Miller (eds.) [1993])の第二部において展開された。

こうした議論は、OG批判に一定の回答を与えつつ、さらに批判理論やフェミニズム、あるいはポスト構造主義やポストモダニズムといった議論を巻き込み、新たな論点を提起しながら展開された(Miller [1993:253-256])。後述するように、おおよそこれらの議論の共通項は、社会学者の営為自体を「近代主義的」などと批判的にとらえ、社会学者の言明を価値中立的で特権的なものとしなないというポストモダニズムの議論と積極的に呼応する形で論じている点である(Troyer [1993:117-128])。その点でこの立場は、いわば社会構成主義の「ポストモダン派」とでも呼ぶべきものである⁽⁹⁾。そこで本稿では、おもに『社会構成主義の再考』の第二部で展開されたようなこうした観点からの議論を整理し、その議論の可能性について検討することにする。

2. ポストモダン派の理論的前提

本稿で検討する「ポストモダン派」の社会構成主義は、ほぼ共通して以下の前提を共有していると思われる。

① 〈問題〉という現実とは、いずれも「それが問

題であると定義する人びとによる活動」(Spector and Kitsuse [1977=1990:117])によって構築される。

これは、社会構成主義の最も基本的な前提である。社会構成主義は、現実と言語的相互作用によって構築されるというバーガーとルックマン(Berger and Luckmann [1966=1977])流のテーゼをその基盤にしている(McGaw [1993:231], Best [1995a:10])。そしてポストモダン派は、この社会構成主義の基本的前提をその中心に確実に据えるのである。

② しかれば、〈問題〉の有無やそのあり方は、クレイム申し立て活動のあり方によって変わってくる。〈問題〉をめぐる現実のあり方は、その定義活動のあり方に依じて偶有的である。

①の前提をとるならば、②は論理的に導出されると考えられる。つまり、バーガーとルックマンが指摘するように、現実が言語的相互作用によって構築されるのであれば、その相互作用が異なれば、そこには別様な〈現実〉が構築されることになると考えられる(Berger and Luckmann [1966=1977:145-151])。

③ そう考えるなら、そこにはある事柄を〈問題〉として構築させ、別の事柄を〈問題ではないもの〉とするような社会歴史的な要因の存在が考えられる。

〈問題〉をめぐる現実の構築が偶有的でありうるのなら、なぜある現実が〈問題〉として構築され、別の現実が〈問題〉として構築されないのかという疑問が生じることになる。ポスト

モダン派は、コンテキスト派と同様に、これを社会歴史的要因によるものと考えるのである。

- ④こうした社会歴史的要因は、〈問題〉の構築のあり方を規定する一種の「権力」として概念化される。

こうした〈問題〉のあり方を左右する社会歴史的要因は、コンテキスト派では、単に「社会構造」や「社会歴史的コンテキスト」などとしてしか説明されない(Best [1995b:344-348])。一方、ポストモダン派は、これをフーコーが言うような、自明視された〈真理〉をめぐる権力的な言説実践の過程(Foucault [1977=1984:72-98])⁽¹⁰⁾として把握する。ポストモダン派は、〈問題〉の構築を、「歴史の中で私たちが繰り返し自らを実体化させる際の権力的な構造化実践のフィクティヴな効果」(Pfohl [1985:228])としてとらえるという立場をとるのである。

- ⑤〈問題〉を語る社会学的テキストは、社会的現実を鏡のように映すのではなく、さらにそれ自体が〈問題〉を構築する。

〈問題〉が、それをめぐるクレーム申し立て活動によって構築されるとするなら、〈問題〉の構築について論じる研究者の言明もまた、再帰的にその〈問題〉の構築活動に関与せざるをえない。ポストモダン派は、「社会理論家は、自らのテキストが現実の社会的構築物であることを認識しながら、その記述を行うべきである」(Miller [1993:264])という点を重視する。ポストモダン派は、研究者の認識を自明視せず、それを一つの解釈(構築)の可能性として把握していくという立場をとるのである⁽¹¹⁾。

このような①〈問題〉の言語的構築性、②〈問題〉構築の可能性の偶有性、③〈問題〉構築をめぐる社会歴史的規定性、④〈問題〉構築の社会歴史的要因の権力性、⑤〈問題〉構築に関わる研究者の再帰性といった前提の上に、ポストモダン派社会構成主義は議論される。

こうしたポストモダン派社会構成主義の前提は、他の立場——客観主義や厳格派、コンテキスト派——の議論の前提と対比してみると、その特質が顕著となる。

例えば、客観主義的アプローチは、社会問題を「客観的」で自明なものとし、〈問題〉の定義について問い返すという姿勢はとらない。

また、厳格派について言えば、彼らは、〈問題〉が言語的相互作用によって構築されるという前提は置くが、クレームの認識については「客観的」で自明なものとし、〈問題〉が偶有的でありうることや、その社会歴史的な規定性については不問に付す(Ibarra and Kitsuse [1993:28])。さらに過程の記述に徹するべきという姿勢からは、研究者の言明について再帰的に考えるという立場は出てこない。

一方、コンテキスト派は、〈問題〉の言語的構築性を肯定し、その偶有性についても認めたと上で、〈問題〉の構築の過程やその成否を社会歴史的要因(コンテキスト)という点から説明する。しかし、あるクレームの存在に対する自身の認識を自明とする態度は、コンテキスト派も厳格派と変わらない。つまり、コンテキスト派もまた、自らの言明の再帰的な作用については、特にこれを意識的にとらえてはいないのである。

また、コンテキスト派は、〈問題〉の言語的構築という立場をとりつつも、同時に〈問題〉の偶有性を確認するために客観的状态への参照

も行う。これは、ウールガーたちや厳格派が指摘する通り、〈問題〉を言語的構築物ととらえ、客観的状态を措定しないという社会構成主義的前提に矛盾する点である(Woolgar and Pawluch [1985a:214-227], Troyer [1992:35-37])(12)。

これに対して、ポストモダン派は、〈問題〉の偶有性に作用する社会歴史的、権力的な要因は理念的に措定するが、それを(コンテキスト派が行っているように)客観的な資料や状態への参照によって確証するという立場はとらないのである。逆に言えば、コンテキスト派が、こうした客観的状态への参照という態度を改めるなら、それはポストモダン派の立場に近いものとなると言えるだろう。

このようなそれぞれの立場の違いを表で示せば次のようになる(13)。

表 客観主義と社会構成主義各派の理論前提

	客観主義	厳格派	コンテキスト派	ポストモダン派
客観主義的前提(〈問題〉とは別に客観的状态が存在し、それは客観的に評価可能)	○	×	○	×
構:①〈問題〉の言語的構築性	×	○	△	○
成:②〈問題〉構築の偶有性	×	×	○	○
主:③〈問題〉構築をめぐる社会歴史的規定性	×	×	○	○
的:④〈問題〉構築をめぐる権力的規定性	×	×	×	○
前:⑤〈問題〉構築に関わる研究者の再帰性	×	×	×	○

○…前提とする ×…前提としない
△…前提とするが完全でない

ポストモダン派社会構成主義は、〈問題〉の言語的構築性という前提を出発点とし、〈問題〉の偶有性を前提として想定する。その上で、〈問題〉を権力的でイデオロギカルな産物ととらえることでOG批判に回答する。それはまた、研究者の言明の再帰性を認めることで、OG批判の目的であった研究者による価値判断の排除と〈問題〉の「客観的」な同定を断念するもの

でもある。確かにコンテキスト派も厳格派も、OG批判に対する一つの回答ではあった。しかし、それらの回答は、ポストモダン派とは異なった前提を措定するものであったと言えるだろう(14)。

3. ポストモダン派社会構成主義の研究の諸例

さて、以下では、前節で検討したような前提を持つポストモダン派の研究が、具体的にどのようなものとして展開されるのか、その可能性について検討する。

これまでになされてきたポストモダン派に属すると思われる研究としては、最初にその立場を示したフォールや『社会構成主義の再考』の第二部で展開された諸研究が挙げられる。確かにこれらの研究は、おおよそポストモダン派的な前提を共有している。だが、それらは必ずしも当初からポストモダン派という立場を意図してなされたものではない。多くは、それぞれ独自の立場から展開された議論が、結果的に「ポストモダン派」と言えるような立場を形成していったすぎないものである。従って、これらの研究は、必ずしも他の立場と完全に排他的に成立しているわけではない。ここではポストモダン派の範囲をあまり厳格に限定せず、ポストモダン派的前提を含んだ研究が具体的にどのようなものとなるかについて、いくつかの研究例を挙げ、それをいくつかのタイプに分類しながら検討することにする。もちろん、こうした分類は便宜的なものであり、相互に重なり合う部分を含んでいる。

3.1. 社会の中で不可視化されたクレームについての研究

ポストモダン派社会構成主義の研究の第一のタイプは、〈問題〉を社会歴史的で権力的な実践の産物としてとらえた上で、この権力的な社会構造の下で不可視化されてきたと考えられるクレーム申し立ての過程について考えるものである。

例えば、スミスは、「実際の問題は社会的に埋め込まれており、またそれは行為の社会的組織化過程のコンテキストの中で〈問題〉として位置づけられ、顕在化する」(Smith [1993:334])と指摘し、社会問題研究は、「実際の問題が顕在化する局所的な社会的コンテキストや、局所的な問題がどのように一般的でパブリックな形での事例や表現として組織化されるようになるか」(Smith [1993:334])を研究すべきだということを主張する。

また、ミラーは、従来の「社会問題の文献は、周辺化(marginalize)された社会問題トークについての体系的な議論をほとんど明らかにしていない」(Miller [1993:349])と批判し、当事者が行うクレーム申し立て活動には様々な形式がありえ、従来の研究はそのごく一部の形式のものみに着目し、他の多くのタイプのクレーム申し立て活動を無視してきたということを指摘する。そこから彼女は、「ポイントは、クレーム申し立てのあるスタイルを沈黙させる実践としての周辺化の研究」(Miller [1993:351])であると、「下からのクレーム申し立て(claims-making from the underside)」に注目していくことの必要性を主張する。

これらの議論は、権力的な社会構造や相互作用過程の中で無視されてきた微弱なクレーム申し立てへの注目を喚起するものである⁽¹⁵⁾。

もっとも、ポストモダン派の研究は、ドミナントな知の布置の中で、当事者自身にも〈問題〉として自覚されることのなかった事柄が、新た

に〈問題〉として認識されるようになることの可能性⁽¹⁶⁾についても、その議論の射程に収めている。この点は特筆すべきだ。例えば、さきのミラーは、「拒食症」や「ヒステリー」などといった身体的症候や、ドミナントなイデオロギーに対抗する若者のサブカルチャーなども当事者からのクレーム申し立てとみなしうるとし、「これらの声なき語り手をクレーム申し立て者として復権させる、すなわち彼らのトークを再政治化させること」(Miller [1993:352])の必要性を主張している。

3.2. 言説—権力分析

ポストモダン派社会構成主義の研究の第二のタイプは、〈問題〉構築のあり方に作用する権力構造そのものについて議論するものである。

例えば、アッガーは批判理論の立場から、注目されるべき問題としての〈不平等〉や〈抑圧〉が、資本主義のイデオロギーやその社会構造の中でしばしば不可視化されてきたということを指摘する(Agger [1993:281-299])。

また、ブラウンは、「人びとがネガティブな制裁なしに、良きもの、正常なもの、許されたものとしてみなすものをコード化する際の道徳的表現のレトリックを明らかにすること」(Brown [1993:501])を主張し、ミラーは、「ドミナントな言説が他の言説を沈黙させるその様態を分析する」(Miller [1993:267])ことを提唱している。

3.3. 社会問題研究における研究者自身の〈問題〉構築活動に関する研究

ポストモダン派社会構成主義の研究の第三のタイプは、研究者の活動の再帰性に注目するも

ので、まず〈問題〉について語る研究者の言明自体が構築する〈問題〉について考える研究が挙げられる。

例えば、フォールとゴードンは、「犯罪学の転換——社会学的脱構築——」と題する論文(Pfohl and Gordon [1986:S94-S113])においてフーコーに言及しつつ、社会学者は、西欧的高度資本主義の制度的実践の中で権力的な知の位置を占有してきたと指摘した上で、自分たちは近代人のヒエラルヒカルな役割を脱したいとし、今日の社会学的記述の形式や、さらに通常科学のあり方についての疑問を発している。

そこで彼らは、一見科学的・価値中立的に見える犯罪学の研究であっても、実は犯罪をモノのように扱い、犯罪者を訓治と危険の対象として支配し、自分たちがあたかも秩序の番人であるかのようにふるまうサディズムの快楽と、犯罪者を監視する快楽と、真理を語る快楽という、犯罪学者自身の三つの快楽が込められていると暴露する。

このタイプの研究は、一見科学的で価値中立的に見られる社会学者の言明そのものを対象とし、そこに暗黙理に反映される研究者の価値判断や欲望の暴露を目指すのである。

3.4. 新しいクレイムの可能性の探求

これまで見てきたように、〈問題〉を構築するクレイムが社会歴史的な、権力的な産物であるならば、これまで社会学者が注目しえなかったクレイムがありうると考えられる。そうした観点から、研究者自らが積極的に別様なクレイムのあり方を考えていこうというのが、ポストモダン派社会構成主義の第四のタイプの研究である。

例えば、ミヒャロフスキーは、日常のやりと

りの基礎でもあり、近代社会科学の基礎にもなっているようなある種のヘゲモニックな表現システムに混乱を与えるような研究を提唱し(Michalowski [1993:389])、オアは、従来の社会構成主義の研究はエリート主義者的であり、クレイムの意味を理解する上で重要なクレイムの書き手の社会的位置を、読み手と書き手自身に思い起こさせるような、より再帰的な記述の形式が必要であるということを主張する(Orr [1993:441-482])。

また、フォールは、別様な記述の形式として、ビデオテクストを用いた超現実主義(surrealist)的な研究を試み(Pfohl [1990:421-441], [1992])、さらにリチャードソンは、従来の社会問題の記述の形式を拒否し、詩的な表現を用いたクレイムの記述の形式を模索していくことを試みている(Richardson [1993:523-531])。

これらの研究は、ポスト構造主義の影響を受けつつ、〈問題〉を近代主義的で特権的視点から構築する研究者のクレイムの形式を脱構築していくことを目指すものである。そして、このタイプの研究の延長線上には、研究者自らが積極的に新たなクレイム(問題の定義)の可能性を提示していくような研究が考えられるだろう。

4. ポストモダン派社会構成主義の含意

社会構成主義の社会問題研究は、社会のメンバーのクレイム申し立て活動の産物としての〈問題〉という認識を原点に研究を進めてきた。これは、〈問題〉の認識をめぐる研究者の価値判断を棄却し、あくまでメンバーの定義に「客観的」に照準することの要請であった。そして、OG批判は、そのように意図された社会構成主義の企てが、必ずしもその要請を満たしきれて

いないことを指摘した。

この批判に対し、コンテクスト派は、そもそもその要請は貫徹することが不可能だとし、研究者の価値判断の混入を容認する形で対応し、厳格派は、その要請が貫徹できなくなるのは、社会学者がクレイムの外部を措定するためだとし、あくまでクレイムの内部に留まり続けることを主張した。

一方、ポストモダン派は、〈問題〉の言語的構築という発想を厳格派——厳格派は、その構築が唯一であることを強調する——とは逆の方向に徹底し、その構築が潜在的に偶有的であることを強調する。その上で、ポストモダン派は、そうした言説が常に権力的なメカニズムの中にあることを重視し、顕在化している〈問題〉が自明なものではなく、それをヘゲモニックなイデオロギーや虚偽意識などの作用(Agger [1993: 286])によって可視化されたものとして把握し、社会学者の営為それ自体に対しても批判的な目を向ける。それは、〈問題〉について語る研究者の言明もまた〈問題〉を構築する一つの等価なクレイムであり、研究者の言明だけが特権的に真実を語りうるわけではないということである。

こうした観点から、ポストモダン派は、〈問題〉を「客観的」に記述していくことよりも、〈問題〉の脱構築などといった一種の社会変革を目指した、より実践的な研究を志向するのである。

このように、言語活動に照準しつつも、特権的な認識を否定し、研究者の再帰性を重視するポストモダン派の発想は、実体としてのクレイムの「客観的」な記述や評価を目指す厳格派やコンテクスト派とは明らかに異なるものである(Troyer [1993:117-128])。そうした立場をとることによって、ポストモダン派は、ある〈問題〉

が、とりわけ権力的な社会構造の中で、そのようなものとして(別様なものではないものとして)構築される過程の説明(17)や、ある〈問題〉の構築に対する別様な〈問題〉の構築の可能性、さらには研究者の言明自体が一種の〈問題〉の構築活動となる、というような新たな論点を持つことが可能となるのである。これは社会構成主義の社会問題研究にとって、少なくとも一つの前進だと言えるだろう。

だが、このようなポストモダン派の議論について、ミラーとホルスタインは次のように疑問を提示する。

第一に、ポストモダン派は、〈問題〉を権力的な社会構造の所産とし、研究者の言明についてもそうした所産として批判的に論じるが、権力的な社会構造の実体視はコンテクスト派と同じ発想であり、そうした議論の前提は認めがたい。第二に、ポストモダン派は、価値中立的で非政治的な言明の不可能性を主張するが、それはポストモダン派の言明についてもあてはまることである。また、ポストモダン派以外の立場が、必ずしも自らの立場の認識論的な優位性を主張しているわけではない。第三に、ポストモダン派は、社会学者自身の言明がエリート主義的で、政治的で、〈問題〉の構築に再帰的に作用する点を問題視するが、かといって再帰的な記述がその解決になるわけではない。また、別様な記述の形式の模索が、どれほど社会生活の理解に寄与することになるかは疑問である(Miller and Holstein [1993:535-547])。

このような疑問に対しては、次のように回答することができるだろう。確かに、ポストモダン派は、〈問題〉構築に作用する社会構造の存在を認める。この点は、コンテクスト派と同じであり、さらに〈問題〉の可視／不可視性をフーコー的に説明する見方は、一種の客観主義と

さえみなしうるものである。

だが重要なことは、ポストモダン派は、あくまで〈問題〉を言説のレベルでとらえている、言い換えれば、言語的構築物としての〈問題〉という社会構成主義の第一の前提を徹底しているという点である。もちろん、2. で述べたように、ポストモダン派は、〈問題〉構築に作用する社会歴史的要因を理念的には措定するが、コンテクスト派のように、客観的状态を実体化し、それを参照することはしない。このような立場に徹すればこそ、2. で検討したような〈問題〉の偶有性に作用する要因が、重要な論点として浮上してくるのである(18)。

また、この前提の徹底は、研究者の言明についても一つの等価な言説としてとらえるという見方を導く。重要なことは、研究者であるからといって、価値中立的で非政治的で「客観的」な言明ができるわけではないということである。この点、ポストモダン派以外の立場は、自らの立場を「客観的」な事実を記述しうる唯一の立場——研究者以外の者に対しても、他の立場をとる研究者に対しても——として位置づけられていると考えられる。

さらに、ポストモダン派の再帰的な研究は、再帰性からの離脱を目指すものではなく、再帰性を織り込んだ上で、研究者自身の営為の問題性に注意を促すものである。同時に重要なことは、〈問題〉が言語的構築物であるならば、〈問題〉のあり方は潜在的に偶有性にかかっているという点である。ただ、この点からすれば、模索すべきなのは、〈問題〉構築の別の記述の形式ではなく、むしろ〈問題〉の別様な見方や議論の可能性を開いていくことである(19)。これは、社会生活を(とりわけその実践的な関心において)理解していく上で、重要な作業であろう。

社会問題研究における社会構成主義の提起は、社会状態の認識に密輸入される研究者の価値判断を排除し、「客観的」な社会問題の説明を目指したものであった。そして、この要請をめぐる論争の中で、ポストモダン派は、〈問題〉の言語的構築という立場に徹し、その構築の偶有性を強調する一方で、社会学者の言明については、それもまた〈問題〉の構築であるととらえ、「客観的」なく〈問題〉の記述の不可能性を主張するという立場を築いていった。このような立場に立つなら、私たちにできることは、多様な〈問題〉の定義(見方)を提案し、様々な議論の可能性を開いていくこととなるだろう。〈問題〉とは、それを声にすることから始まるのだから。

そして、このようなポストモダン派社会構成主義は、実践的な社会問題研究の一つのあり方を提示していると言えるだろう。

註

(1) 本稿では、“constructionism”の訳語に原則として「構成主義」を充てている。constructionismを標榜する立場は、今日、社会問題研究だけでなく、社会心理学や家族療法、ソーシャルワーク、科学社会学、感情社会学などといった様々な分野でみることができる。そのうち、社会問題研究の領域では、「構築主義」という訳語が一般化しているようであるが、その他の領域では、「構成主義」の訳語の方がやや多くみられるようである(例えば浅野[1997:153-161]、中河[1995:198-211]、野口[1995:180-186]など)。本稿は、バーガーとルックマンの議論に端を発する、これらの議論に共通する理論的前提について議論していることから「構成主義」という訳語を用いることにした。

(2) ここで客観的アプローチとして想定されている

- のは、おもに機能的アプローチや規範的アプローチである(Spector and Kitsuse [1977=1990:37-62])。
- (3) この誤りは、価値葛藤アプローチやラベリング理論にも含まれているとスペクターらは指摘している(Spector and Kitsuse [1977=1990:63-99])。
- (4) ここで重要なことは、社会構成主義をめぐる批判や論争が、単純に研究者の立場性をめぐってなされたのではなく、それがあくまで認識論上の(ないし科学的妥当性の)問題として展開したという点である。この点は、同じ研究者の立場性をめぐる議論であっても、例えば、「負け犬の側に立つ」というベッカーの主張(Becker [1967:239-247])に対するグールドナーの批判(Gouldner [1968:103-116])が、あくまで研究者の道徳性という水準でなされたのとは異なる点である。なお、中河は、アメリカでの社会構成主義をめぐる論争が、こうした科学的妥当性に関してなされたのに対して、日本での論争は、むしろ研究者の道徳性の問題として展開したと指摘している(Nakagawa [1995:300-301])。
- (5) 前者のような批判に対して中河は、社会構成主義側からの想定される回答として、個々の問題状態に関する研究は、それが〈問題である〉ということ的前提にする限り否定されるわけではないが、その前提を置かない場合に社会問題研究が対象にしうるのは、クレーム申し立て活動以外にないのではないかと指摘している(中河 [1990:50-51])。一方、後者のような批判について中河は、社会問題に関する価値判断は、社会のメンバーとしての立場と研究者としての立場を切り離し、あくまで社会のメンバーとしての立場の範囲内で行えばよいとしている(中河 [1990:51-53], [1992:57-64])。だが、そのような立場の分離が、実際の研究の中でいかにすれば可能となるのかは疑問である。また、この疑問は、後述の「厳格派」の議論にもあてはまるものである。
- (6) この論争については、本文中で言及したもの以外にWoolgar and Pawluch [1985b:159-162], Pfohl [1985:228-232], Schneider [1985:232-234], Hazelrigg [1985:234-237], [1986:S1-S12], 中河 [1990:49-79], [1992:57-81], 鮎川 [1992:43-73], Troyer [1992:35-37], Rafter [1992:38-39], 足立・工藤・平・馬込 [1993:15-40], 岡田 [1993:1-46], 中根 [1997:52-84]およびHolsten and Miller (eds.) [1993]の第一部に寄せられた諸論考についても参照せよ。
- (7) つまり、状態の判断にはそれを行う社会学者の価値判断が混入するが、ある活動をクレームと認知し、分類することは社会のメンバーのそれと同じ常識的判断であって、それは「客観的」な観察が可能だということが、スペクターらの議論の前提である(Spector and Kitsuse [1977=1990:124])。
- (8) もっとも、キツセは後にサービンとの編著の中で、OG批判は、社会構成主義の研究への研究者の再帰的な影響を一切排除することだとし、そうした要請を貫徹することの可能性に疑問を投げかけ、むしろコンテクスト派的な立場に共感を寄せている(Sarbin and Kitsuse [1994:14])。
- (9) このような立場を中河は「脱構築(deconstruction)派」と呼ぶ(中河 [1990:58])。だが、ミラーが指摘しているように、この立場は、単純に〈問題〉の脱構築についてだけ論じるのではなく、社会問題研究そのものを、より広範なモダニズム/ポストモダニズムの文脈の中で論じるものである(Miller [1993:253-278])。その点からすれば、この立場は、単に「脱構築派」と呼ぶよりも「ポストモダン派」と呼ぶ方が適切だと思われる。
- (10) これをフーコーの議論に即して十全にリファアーしている余裕はないが、ごく端的に述べるなら、「その社会が真なるものとして受け入れ機能させる特定の言説のタイプ、言語表現に真偽の区別を与えるメカニズムとベクトル、真と偽のそれぞれに対する取り扱いの処方、真理の獲得に有効とされる技術と手続き、何が真であるかを決定する権限

をもつ人間の地位」(Foucault [1977=1984:95])などが、その内容と言えらる。

- (11)これは、文脈はやや異なるが、その研究にボルナーが言うところの「ラディカルな再帰性(radical reflexivity)」(Pollner [1991:370-380])を要請するものと言えらる。なお、ボルナーは、このような研究者自身の再帰性を研究対象に含めた社会構成主義を「分析的構成主義(analytic constructionism)」として提案している(Pollner [1993:199-212])。
- (12)トロイヤーは、この当時は厳格派の立場をとっていたが、その後はポストモダン派の立場に傾斜したように思われる。
- (13)本稿で議論している「厳格派」、「コンテキスト派」、「ポストモダン派」という区分は、社会問題論者が分析上、理念的に設定したものであって、必ずしも実際の研究がこのように明確に区分されるわけではない。当然、これらの境界領域に位置すると思われる研究も存在する。
- (14)このように、これらの理論的立場は、それぞれ相互に異なった理論的前提を置き、そこから相手の立場を問題化している。少なくとも前提を異にしている限りにおいては、それらの間に理論的な優劣をつけることはできず、結局、いずれの立場を選択するかは研究者の目的や好みの問題ということになるだろう。むしろ、ここで考えるべきなのは、こうした互いに相手の理論的前提が、自らの批判の前提を構成してしまうような事態とは何なのかという点である。なお、浅野は、家族療法の社会構成主義に見られる同様の理論的困難について考察している(浅野 [1996:101-110])。
- (15)これは、草柳の整理に従うなら、〈問題〉定義の表明とその「クレイム申し立て」としての社会的なカテゴリー化の過程(草柳 [1996:34-37])に注目する議論である。このような相互作用過程に注目する議論としては、Emerson and Messinger [1977:121-134]、草柳 [1994:167-178]や Miller and Holstein (eds.)

[1997]に寄せられた諸論考などがある。

- (16)これは、草柳的に言うなら、〈問題〉として定義されてこなかった「問題経験」が、新たに〈問題〉として定義されるようになること(草柳 [1996:30-34])の可能性だと言えらる。このような過程については、福重 [1997:131-146]の議論も参照のこと。
- (17)もちろん、こうした研究が、単に〈問題〉構築をめぐる相互作用過程に照準するだけなら、それはコンテキスト派とさして変わらない。重要なことは、〈問題〉構築の過程がフーコー的な権力概念と結びつけて論じられることで、〈問題〉構築の成否やその可視化/不可視化のメカニズムがより明確に説明されるということである。
- (18)もちろん、このような〈問題〉の規定要因を言説の外部に求める説明を一切認めないという前提を置く者もいるだろう。だが、ヘイゼルリグが指摘するように、何らかの言説の外部＝「客観性」についての前提を置かずに〈問題〉の偶有性を「客観的」に論証することは極めて困難であり(Hazelrigg [1986:S1-S13])、結局、それは〈問題〉の偶有性を不問にせざるをえなくなるだろう。言うまでもなく、これが「厳格派」の立場である。
- 一方、あらゆる〈現実〉を権力関係の所産としての構築物とみなした場合には、その〈権力〉自体も観察者の言明による権力的な構築物ということになる。事実、ポストモダン派は、そうした見方をし、自らに作用する権力関係の分析をもその議論の射程に含めている。だが、その〈自らに作用する権力関係の分析〉に作用する権力関係についてはどうなのかというように考えた場合、それは無限後退に陥らざるをえなくなる。これは、観察者が自らの言明の権力性に「自覚的」になるだけでは抜け出すことのできないアポリアであると浅野は指摘する(浅野 [1997:153-161])。浅野によれば、こうしたアポリアが生じるのは、社会構成主

義（本稿に即して言うなら特にそのポストモダン派）が「現実」は、社会的に、とりわけ権力関係の中で構築される」という前提を無自覚に置いているためである。浅野は、この前提を問い返し、人びとの認識をより根底で支えている物語行為の重要性を指摘する。この指摘は、社会構成主義に

とって重要な論点を含むものであり、この点については稿を改めて検討したいと思う。

(19) もちろん、3.4.で紹介したような新たな記述の形式を探求する研究も、新しいクレイムの可能性を探求する研究の一つではある。

文献

- 足立重和・工藤宏司・平英美・馬込武志 1993 「構築主義の可能性——Comments on NAKAGAWA——」『大阪教育大学紀要 第Ⅱ部門・社会科学・生活科学』42(1) 大阪教育大学 :15-40
- Agger, Ben 1993 "The Problem with Social Problems: From Social Constructionism to Critical Theory." *R.S.C.* :281-299
- 浅野智彦 1996 「家族療法における権力問題」『東京学芸大学紀要 第3部門(社会科学)』47 :101-110
- 1997 「構成主義から物語論へ」『東京学芸大学紀要 第3部門(社会科学)』48 :153-161
- 鮎川潤 1992 「社会問題研究における構築主義パースペクティブ——エスノメソドロジカル批判を手がかりに——」『金城学院大学論集(社会科学編)』34 金城学院大学 :43-73
- Becker, Howard S. 1967 "Whose Side are We on?" *Social Problems*. 14(3) :239-247
- Berger, Peter and Luckmann, Thomas 1966 *Social Construction of Reality: A Treatise in Sociology of Knowledge*. Doubleday & Company. = 1977 山口節郎訳『日常世界の構成——アイデンティティと社会の弁証法——』新曜社
- Best, Joel 1993 "But Seriously Folks: The Limitations of Strict Constructionist Interpretation of Social Problems." *R.S.C.* :129-147
- 1995a "Typification and Social Problems Construction." Best, J. (ed.) *Images of Issues: Typifying Contemporary Social Problems*. (2nd Edition) Aldine de Gruyter. :1-10
- 1995b "Constructionism in Context." Best, J. (ed.) *Images of Issues: Typifying Contemporary Social Problems*. (2nd Edition) Aldine de Gruyter. :337-354
- Blumer, Herbert 1971 "Social Problems as Collective Behavior." *Social Problems*. 18 :298-306
- Brown, Richard H. 1993 "Moral Mimesis and Political Power: Toward a Rhetorical Understanding of Deviance, Social Control and Civil Discourse." *R.S.C.* :501-522
- Emerson, Robert M. and Messinger, Sheldon L. 1977 "The Micro Politics of Trouble." *Social Problems*. 25 :121-134
- Foucault, Michel 1977 "Vérité et pouvoir." *L'Arc*. 70 :16-22 = 1984 北山晴一訳「真理と権力」桑田禮彰・福井憲彦・山本哲士編『ミシェル・フーコー 1926-1984』新評論 :72-98
- 福重清 1997 「社会問題と問題経験の構築／脱構築——物語アプローチの視点から——」『現代社会理論研究』7 現代社会理論研究会 :131-146
- Gouldner, Alvin W. 1968 "The Sociologist as Partisan: Sociology and the Welfare State." *American Sociologist*. 3 :103-116
- Hazrigg, Lawrence E. 1985 "Were It not for Words." *Social Problems*. 32(3) :234-237

- 1986 "Is There a Choice Between 'Constructionism' and 'Objectivism'?" *Social Problems*. 33(6) :S1-S13
- 宝月誠 1990 『逸脱論の研究——レイベリング論から社会的相互作用論へ——』 恒星社厚生閣
- Holstein, James A. and Miller, Gale (eds.) 1993 *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory*. Aldine de Gruyter. [文献リストの中ではR.S.C.と略]
- Ibarra, Peter R. and Kitsuse, John I. 1993 "Vernacular Constituents of Moral Discourse: An Interactionist Proposal for the Study of Social Problems." *R.S.C.* :25-58
- 草柳千早 1994 「『問題』経験とクレイム——構築主義の社会問題研究によせて——」『年報社会学論集』7 関東社会学会 :167-178
- 1996 「『クレイム申し立て』の社会学再考——『問題経験』の社会学に向けて——」『現代社会理論研究』6 現代社会理論研究会 :29-42
- McGaw, Dickinson 1993 "Postmodern Claimsmaking: An Abortive Politics." *Studies in Symbolic Interaction*. 15 JAI Press Inc. :221-241
- Michalowski, Raymond J. 1993 "(De)Construction, Postmodernism, and Social Problems: Facts, Fictions, and Fantasies at the 'End of History.'" *R.S.C.* :377-401
- Miller, Gale 1993 "New Challenges to Social Constructionism: Alternative Perspectives on Social Problems Theory." *R.S.C.* :253-278
- Miller, Gale and Holstein, James A. 1993 "Social Constructionism and Its Critics: Assessing Recent Challenges." *R.S.C.* :535-548
- (eds.) 1997 *Social Problems in Everyday Life: Studies of Social Problems Work*. JAI Press Inc.
- Miller, Leslie J. 1993 "Claims-Making from the Underside: Marginalization and Social Problems Analysis." *R.S.C.* :349-376
- 中河伸俊 1990 「クレイム申し立ての社会学——構築主義の社会問題論の構成と展開（下）——」『富山大学教養部紀要（人文・社会科学篇）』23(2):49-79
- 1992 「社会問題のゲームと研究者のゲーム——『社会問題』と『逸脱』へのコンストラクショニスト・アプローチの諸課題——」『富山大学教養部紀要（人文・社会科学篇）』25(2):57-81
- 1995 「構成主義の感情論」船津衛・宝月誠編『シンボリック相互作用論の世界』恒星社厚生閣 :198-211
- Nakagawa, Nobutoshi 1995 "Social Constructionism in Japan: Toward an Indigenous Empirical Inquiry." Holstein, J. A. (ed.) *Perspectives on Social Problems*. 7 JAI Press. :295-310
- 中根光敏 1997 「〈構築主義〉以後の社会問題研究の社会的課題」『社会学者は2度ベルを鳴らす——閉塞する社会空間／溶解する自己——』松籟社 :52-84
- 野口裕二 1995 「構成主義アプローチ——ポストモダン・ソーシャルワークの可能性——」『ソーシャルワーク研究』21(3) ソーシャルワーク研究所 :180-186
- 岡田光弘 1993 「社会構成主義の現在——社会問題のエスノメソドロジ的理解を目指して——」『年報筑波社会学』5 筑波社会学会 :1-46
- Orr, Jackie 1993 "Panic Diary: (Re)Constructing a Partial Politics and Poetics of Dis-ease." *R.S.C.* :441-482
- Pfohl, Stephen 1985 "Toward a Sociological Deconstruction of Social Problems." *Social Problems*. 32(3) :228-232
- 1990 "Welcome to the PARASITE CAFE: Postmodernity as a Social Problem." *Social Problems*. 37(4) :421-442

- 1992 *Death at the Parasite Cafe: Social Science (Fictions) and the Postmodern*. St. Martin's Press.
- Pfohl, Stephen and Gordon, Avery F. 1986 "Criminological Displacements: A Sociological Deconstruction." *Social Problems*. 33(6) :S94-S113
- Pollner, Melvin 1991 "Left of Ethnomethodology: The Rise and Decline of Radical Reflexivity." *American Sociological Review*. 56 :370-380
- 1993 "The Reflexivity of Constructionism and the Construction of Reflexivity." *R.S.C.* :199-212
- Rafter, Nicole H. 1992 "Some Consequences of Strict Constructionism." *Social Problems*. 39(1) :38-39
- Richardson, Laurel 1993 "How Come Prose?: The Writing of Social Problems." *R.S.C.* :523-531
- Sarbin, Theodore R. and Kitsuse, John I. 1994 "A Prologue to Constructing the Social." Sarbin, T. R. and Kitsuse, J. I. (eds.) *Constructing the Social*. Sage. :1-18
- Schneider, Joseph W. 1985 "Defining the Definitional Perspective on Social Problems." *Social Problems*. 32(3) :232-234
- Smith, Dorothy E. 1993 "'Literacy' and Business: 'Social Problems' as Social Organization." *R.S.C.* :327-346
- Spector, Malcom and Kitsuse, John. I. 1977 *Constructing Social Problems*. Cummings Publishing Company. = 1990 村上直之他訳『社会問題の構築——ラベリング理論をこえて——』マルジュ社
- 徳岡秀雄 1997『社会病理を考える』世界思想社
- Troyer, Ronald J. 1992 "Some Consequences of Contextual Constructionism." *Social Problems*. 39(1) :35-37
- 1993 "Revised Social Constructionism: Traditional Social Science More Than a Postmodern Analysis." *R.S.C.* :117-128
- Woolgar, Steve and Pawluch, Dorothy 1985a "Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problems Explanations." *Social Problems*. 32(3) :214-227
- 1985b "How Shall We Move beyond Constructivism ?" *Social Problems*. 33(2) :159-162

(ふくしげ きよし)